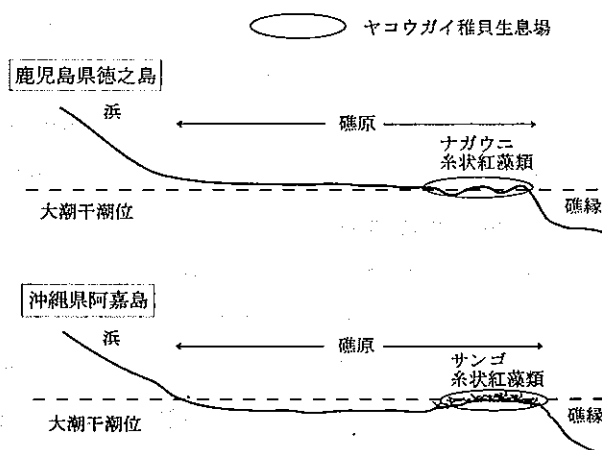


が、過去の取扱量資料を保存していたのは1業者(仲買業者G)だけであった。1995年1月の4業者の聞き取り調査によると、仲買業者Gの取扱量は4業者の全取扱量の約60%であった。漁業者は通常同一業者と取り引きするので、各業者の取扱量の割合は大きく変わらないと考えられる。そこで仲買業者Gの取扱量を基に八重山海域でのヤコウガイ漁獲量を推定した。(図I-1)。八重山の漁獲量は1987年に約3,400kgであったが、以降急減し1988~89年には1,500~1,800kg、そして1990年以降は300~800kgとなっている。1987年以前の資料はないが、漁民からの聞き取り調査によると1980年頃は1日に数百kgも漁獲することがあったというので、1980年代の初めはかなりの漁獲量があったと思われる。

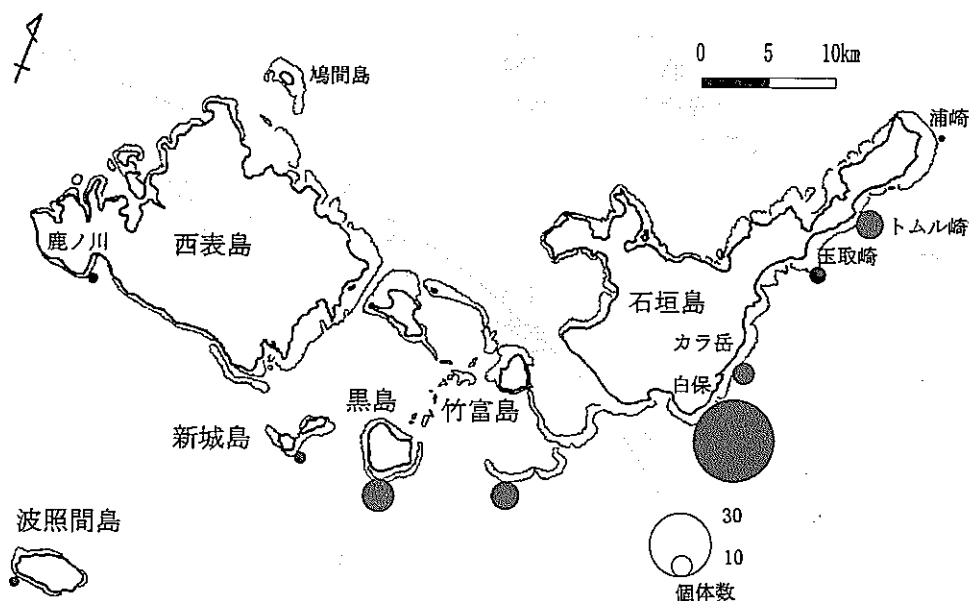
1994~97年に漁獲されたヤコウガイの殻高・殻幅・殻重量測定を随時行い漁獲サイズを調べた(図I-2)。殻高は124~197mmの範囲で、平均値は169mm、モードは165~170mmにあった。漁獲物は160~180mmのものが多く、このサイズのヤコウガイが全体の67%を占めた。また140mm未満のものは非常に少ないので、殻高140mmから漁獲されると考えてよいだろう。殻幅は114~206mmの範囲で、平均値は172mm、モードは170~175mmにあった。殻重量は270~1,610gの範囲で、平均値は858g、モードは750~800gにあった。殻高・殻幅の頻度分布は単峰型に近いもので、これから年齢グループ分けをするのは難しい。殻重量の頻度分布は多峰型を示し、この方がグループ分けできる可能性が高い。まだ、測定個体数が226個と少ないので、今後測定数を増やす必要がある。

## 2. 生息環境

ヤコウガイ稚貝の生息環境に関する知見は少なく、今までに鹿児島県徳之島と沖縄県阿嘉島<sup>1)</sup>での報告があるだけである。徳之島では、礁原から礁縁にかけての珊瑚の生育が余り見られない。ここでは、干潮時にチョウセンサザエなどを目的に地元の人たちが潮干狩りをする際、礁縁近くの礁原でナガウニが形成した窪みが多くあるようなところで、30mm程度のヤコウガイ稚貝を発見するとのことである。また阿嘉島では、珊瑚の生育状況が良い礁縁付近で10mmの稚貝が発見されている(図I-3)。今のところ礁縁付近の礁原部での発見例しかないが、後述するように成貝



図I-3 ヤコウガイ稚貝の生息環境



図I-4 八重山海域のヤコウガイ漁場